

実践女子大学・実践女子短期大学部公開民講座講演会記録

## 出久根達郎「作家の値段」

日時 平成二六年一〇月一八日（土） 一四時～

場所 実践女子大学渋谷キャンパス、五〇三教室

司会 栗原 敦（本学文学部教授）



## 一、本の値段

本の値段というものは、でたらめに付いてるんじゃないやなくて、しかるべき理由があつて付けられています。

ここですね、古本屋はどうやって値段を付けてるんだろう。いい加減に付けていたら、まず売れない。逆に言いますと、いい加減に安い値段を付ければ、即売れてしまう。売れなくても困るし、早めに売れちゃつても、なんか損したなつて感じるつてのが物の値段の不思議なところであつて、そこそこ、微妙に標準の値段を付ける。

ですから古本屋さんで、例えばこっちの店で千円で売つてる本を、こっちの店に来てみたら百円で売つてたつてことはありますけれども、別の店へ行きますと、大体千円ぐらいで付いてると。これが標準の値段ですね。

だけど、その標準の値段をどこでつけるかと言いますと、別にこの本はこの値段で売りなさいつていう一覧表みたいなものがあるわけじゃないんです。私どもは先輩

から教わつた知識とか、それから自分で学んで勉強して、そして値段を自分で作つて行きます。その作つていく過程では、もちろん余所の店の値段も参照します。そしてこれなら大丈夫だろうという値段を、自信を持って付けるわけです。自信を持って付けませんと、お客さんに「これ本当にこの値段ですか」つて言われた時に「そうですよ」つて言えないですよ。お客さんに「この値段は適正な値段ですか」つて言われた時に「はい、そうです」つて自信をもつて言える値段を、私どもは付けなきゃならないわけです。

でもいろんな知識を持つていないと、自信を持つて値段を付けることが出来ない。古本屋はその知識をどうして得るか、これはこれからの話にも関わつて来ますけれども、実は古本屋独特の本の見方と言いますか、作家の著書の見方をしてるんです。これはなかなか一般の皆さんにはお話し出来ない企業秘密ですが、今日は特別ですね。実践女子大学の公開講座にお集まりいただいた皆様のために公開しますが、余所ではお話しにならないで

ください（笑）。

何故古本屋がそういう値段の付け方を公開しないかって言いますと、お客さんに教えてしまうと、儲からないからなんです。早い話が、お客さんから本を買う時に儲かるような値段で仕入れないといけませんから。ところがお客さんの方が知識が豊富で「この本はこれぐらいするでしょうから、これぐらいで買って下さいよ」と言われますと、私ども古本屋は儲けが少なくなってしまうんです。ですから公開しないんですね。これからいくつかお話しますが、私どもはメモをしてくださっても結構ですけれども、人にはお話しにならないでください。

## 二、宮沢賢治

ここに、こういう本がございます。なんだか汚らしい埃だらけの本ですね。これは『国訳妙法蓮華經』というお経です。なんの変哲もない、オレンジ色の鮮やかな表紙の中に活字で組んであります。こういう本が皆さんの

納戸や押入れの中から出てきた時に、なんだか汚らしい本だからゴミに捨てちゃおうなんて、絶対に考えないでください。古い本というのは宝物が多いんです。今日は宝物のお話を致しますけども、本と言うのはまず発見しました時に、これは古本屋もそうなんですけど、最初に〈奥付〉<sup>おくづけ</sup>というのを見ますね。

〈奥付〉には本の素性が印刷されています。つまりこの本は著者が誰で、どこで発行されたもので、定価がいくらであるというデータが記してあります。

このお経は活字の本なんですけども、昭和九年六月五日発行となっております。発行者が宮沢清六という名前になっております。岩手県の稗貫郡という、大体この岩手県の稗貫郡という住所と、それから宮沢清六という発行者の名前、これで普通の古本屋はまずピンとくるんです。これだけでハッと思うわけですね。印刷者と印刷所は岩手県の盛岡、戦前ですから盛岡市内となっております。九〇番地。もう皆さんもこれまで聞けばお分かりですよ。盛岡、宮沢清六とこう来れば、詩人の宮沢賢

治となんか関係があるのではないかと、こういうふうに思わなくちゃダメですよ。宝物を逃してしまいます。今皆さんにお見せしてるこの本、あとで値段をお教えしますけれども、聞いてビックリです。

こういうふうにならず〈奥付〉を見る。そしてパッと、いつとう最後のページをめくりますね。ここです、最後のページ〈奥付〉から前の１ページを見た時に、この本の素性つてのが分かるわけです。つまりこう書いてあります。

合掌。私の全生涯の仕事はこの経をあなたのお手許に届けそして其中にある仏意に触れてあなたが無上道に入られん事を御願いのほかありません。

昭和八年九月二一日臨終の日において、宮沢賢治

これを読めば皆さん分かりますね。要するに、宮沢賢治が臨終の日、こういうふうな遺言をしたわけです。私の生涯はこの『国訳妙法蓮華經』をあなたの手に渡し

て、そしてあなたが仏様の御心に触れて「無上道」っていうのは仏の道です。この上もない道ですね。仏道に入られることを願ってやみません。つまり自分は生涯をこの任務に懸けてたんだと言う宮沢賢治の遺言がここに記されてるわけです。

従って宮沢清六さんっていうのは賢治の弟さんなんですけども、兄の遺言によつてこの本を作りました。謹んであなたにこの書を差し上げます。一千部作りましたとあります。

宮沢賢治が直接書いた本じゃありませんが、賢治が亡くなる時の遺言を元にして作られ配られた本ということで、古本に値段が付くんです。単なるお経の本だったら百円か二百円か、そういう値段なんです。ところが、これはいわば宮沢賢治の生涯をあらわす大切な物であるということ、私ども古本屋は値段を付けるんです。作家の著書だけじゃなしに、その作家が誠実に生きた証っていうものですね。それが本であるならば、亡くなったあと出された本でも値段が付くということ。これは宮沢

賢治のこの一冊が証明してるわけですね。

宮沢賢治は今申し上げましたように、昭和八年に亡くなっております。二階で寝ていたんですけども、突然息が苦しくなると、お父さんと弟の清六さんとが枕元に行ったときに、苦しい中でただ今申し上げたような遺言をお父さんになさったんですね。お父さんが「賢治、お前は偉いよ」ってなことを言ったら、賢治が傍らの清六さんに「お父さんに褒められてしまった。初めてだ」ってなことを言ったんですね。オキシフルで、手や首、胸など清めてから、水を一杯飲んで絶命したと言われております。

実は賢治と言う人は、二年前の、折しもちょうど亡くなられた九月二十一日にですね、やっぱり東京に出てた時に倒れちゃったんですね。このときもお父さんとお母さんに遺言書を書きました。その遺言っていうのが、ざっとこんな内容のものです。

篤い御恩をいただきながら心に背き、万分の一も恩返

し出来ぬ。この次の生、またはその次の生で御恩をお返し致します。ご信仰でなくともお題目で自分を呼んでほしい。お題目さえお唱えいただければ、絶えずおわび申し上げお答えいたします。

弟さんとお父さんは、この賢治の遺言をまさに実行して、この本を一千部作り知友の方に分けました。もちろん売ったんじゃないですよ。タダで差上げたわけですね。

賢治に限らず、日本の詩人の方というのは、生きてる時には今のようにな有名ではありませんでした。ごく一部の人の間でしか知られてなかったんです。我が国の詩人は大体そうなんです。

### 三、金子みすゞ

三・一一の東日本大震災が起こったあと、テレビから公共広告というのがやたらと流れましたね。そのなか

一つの詩がありました。

「ごめんね」っていうと

「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、

いいえ、だれでも

これは金子みすゞの詩なんです。でも彼女の名前が世に出たのは、ただか昭和五〇年代ぐらいなんです。もちろん亡くなったのは、そのずっと昔、戦前ですけども、世に知られたのが昭和五七年なんです。ついこないだなんですよね。埋もれていた女性詩人を発掘したのは、矢崎節夫さんという当時の大学生でした。

山手線かなんかで岩波文庫の『日本童謡集』というのを読んでたら、金子みすゞの「大漁」という詩が収録されてまして、それを読んで非常に感動しまして、「この詩人は他にどういいう詩を書いているんだろう」と自分で探し始めたんです。ところがないんです。古本屋に行き

まして、もちろん知りません。そういう本が出てる詩人じゃないからです。それで矢崎さんは、この金子みすゞっていう人の他の詩が読みたくなって、一生懸命探すんですね。

結局みすゞの弟さんが見つかって、弟さんは養子にやられていたために苗字が替わっていて分からなかったんですが、劇団若草を主宰した方が金子みすゞの弟さんなんです。

昭和五七年に、矢崎節夫さんが弟さんに会いに行つたところ、「これが姉から預かった詩なんです」と、三、四冊の手帳を見せてくださったんですね。その手帳のおかげで、私どもは他の作品も読むことが出来ますし、「こだまでしょうか、いいえ」という具合に、普段からこうやって耳に触れるようになったわけです。

ちなみに矢崎節夫さんが感動したその「大漁」という詩はですね。こういう詩なんです。

朝やけ小やけだ

大漁だ

大ばいわしの

大漁だ

浜はまつりの

ようだけど

海のなかでは

何万の

イワシのとむらい

するだろう

大羽イワシという、マイワシのことなんですけど、大羽イワシがたくさん獲れて大漁だ、大漁だって言うんで、漁師さんたちが大騒ぎしてる。その頃海の中ではイワシのお甲いが行われてるだろうと、言ってみますとこういう内容の詩なんです。矢崎さんならずとも、ちょっとハツとするような内容の詩ですね。

金子みすゞは本屋の娘さんでして、下関の新刊書を扱う店の娘さんで、詩が好きで、〈東見本〉って言うんで

ですけど、要するに表紙はこれから印刷する本にそっくりに作られているが、中は真つ白という〈東見本〉が出版社から書店に送られてくるんですけど、それをノート代わりにして詩を書きつけてたんですね。結婚しましたが、ご主人というのが本を読むのが嫌、文字を書くのも大嫌いで、それで結局離婚することになるんですね。離婚にあたって一人娘がいたんですけど、一人娘をご主人が引き取るからっていうんで、それでみすゞは、本名テルって言うんですけど、テルさんは娘とお風呂に入って、その晩自殺してしまっただけ。娘と離れることも、詩を書いちゃいけない、本を読んじゃいけないっていうそういう亭主と一緒に生活が嫌になったんだろうと思うんですけど、薬を飲んで亡くなってしまいました。亡くなったのが二六歳なんです。

そういうわけで作品そのものが埋もれてたわけですよ。たつた一つの「大漁」という代表作が岩波文庫に載っていたおかげで、矢崎節夫さんの目にとまって、それから金子みすゞの発掘が始まったわけです。これから、み

すゝの詩のなかから有名なフレーズを抜いて幾つか挙げてみますが、こんな不思議な詩なんですね。

みな知つてるとおもつてた

だけどそれはうそでした

（海とかもめ）

誰も見たことないけれど、誰が嘘だと言いましよう

（見えないもの）

私は不思議でたまらない

誰にきいても笑つて、あたりまえだということが

（不思議）

誰がほんとをいうでしょう、私のことを、わたしに

（誰がほんとを）

海と魚と小さな動物。こういう物を題材にして作った方です。

#### 四、竹内浩三

もう一人ですね、私どもが知らないと言いますか、ずっと埋もれていて、それから発掘されて、現在私どもに読まれるようになった男性詩人の例を挙げますと、竹内浩三という方がおります。

三重県伊勢の人でして、大正一〇年生まれなんです。が、生後間もなくご両親を亡くすんです。お父さんもお母さんも赤ん坊の時に亡くなられて、それでお姉さんが一人いるんですけど、そのお姉さんに育てられた人なんです。ね。

子供の時から漫画が好きで、将来漫画家になろうと思つたけれど、戦前の日本じゃ漫画では飯が食えない、そこで漫画家を諦め、映画監督になろうと思つて、日大芸術学部に入るわけです。ところが戦争中なものですから、学徒動員で筑波の飛行場、私の田舎なんですけれども、茨城県の筑波山の麓にある飛行場に動員をかけら



れ、毎日、毎日飛行機の油さしなどをやらされるんですね。その頃古い師に手相を見てもらったって話があるんです。

そうしましたら「あんたは五〇歳まで生きられる。そして結婚して、とてもしっかりしたお嫁さんをもらって、子供さんが六人できるだろう。一番末の男の子だけには苦労させられるかもしれない。でも、晩年大変な名声を得ますよ」って、こういう予言を手相師が語ったって言うんですね。

でも実際はたった一つしか当たらなかった。最後の、名声を得る、だけがかろうじて。五〇歳なんて生きられなかった。戦争で出征し、兵隊にさせられた。フィリピンに参りまして、もつとも残酷な〈白兵戦〉と言うんですね、日本刀を振りかざして敵に切り込む、切り込み隊です、これで戦死しました。五〇歳どころか、二三歳で、です。昭和一九年にお姉さんに女の子が生まれます。竹内浩三は筑波の飛行場からこの赤ちゃん宛てに葉書を書いてるんですね。まだ字も読めない赤ちゃんに、

こんな葉書を書いてます。

お前が生まれた時はお前の国にとつてただならぬ時であり、お前が育っていく上でも甚だしい不自由があるであろうが、人間のたった一つの務めは生きることであるから、この務めを果たせ。

葉書に五行ぐらい。たったこれだけの文章を赤ちゃんに出したんです。昭和一九年に、赤ちゃんに宛てて出た。言ってみたらこれが遺言ですよ。本人はそのあと戦死してしまいます。

代表的な詩に「骨のうたう」っていう詩があるんですけど、これはどういう詩かと言いますと、戦争に行つて、兵隊に行つて、戦死して、お骨になって、白い箱に入られて故郷に帰つて参りましたっていう詩なんです。その白い箱の中のお骨が、戦争が終わったあとの日本を見ている詩なんですね。つまり故郷、日本ですね。発展に忙しくて、皆自分を顧みる人はいなかった。女の

人は化粧に忙しくて、そういうことに勤しんだと、骨箱の中から、いわば現在の日本を眺めてるような詩を書いた人なんです。予言みたいなものですね。

これは大変素晴らしい詩ですが、森村誠一さんが小説の中でこの「骨のうたう」を引用して、ようやく知られるようになりました。これも竹内浩三の死後に、友達が彼の遺稿を全部集めまして、一冊にして世に出してくれたおかげで、私どもがこういう詩人がいたんだと言うことが分かるわけです。

現在、竹内浩三さんのお姉さんも亡くなりまして、お姉さんが弟さんの遺稿や手帳やら全部松阪市の本居宣長記念館に寄贈なさいまして、あちらで保管されております。

ですから、金子みすゞも竹内浩三も、遺稿や手紙は古本屋には全く出てきません。私ども古本屋の商売と言いますのは、物が無くては値段が付けれませんから、この二人に限っては値段の付けようがないですね。

## 五、古本屋の仕事

でも宮沢賢治の場合は幸いにして本が出ております。そういうわけで宮沢賢治の本と言うものは私どもが売買してるわけなんですけども、実は宮沢賢治がこうして私どもに知られるようになったのは、古本屋の力つていうものが非常に大きく預かっているんです。

傲慢するわけじゃありませんし、へえ、とお思になるかもしれませんが、実は古本屋と言いますのは（世に埋もれた才能や偉才を掘り出して、人々に知らせる）そういう商売なんです。先ほどの金子みすゞにおける矢崎節夫さんのように、そういう役割をしてるんです。もちろん、お金も儲けますけれども、それは生業としてでして、本当はそういう形で野の遺賢を世の中に知らせるために古本屋があるわけです。

早い話が、古本屋がこの本は内容価値が乏しいから、例えば百円でお店に出しますね。この百円の値段を付け

たということが非常に大事なことです。と言いますのも、これは内容がないからと古本屋がバツとゴミにしてしまったら、その本は死んでしまう。百円という値段を付けたことによって、生きられるんです。「百円、安いな」っていうんでお客さんが買ってくれる。少なくともそのお客さんが百円で買って読んで、例えば二日後か三日後に捨ててしまうかもしれませんが、それでも二日なり三日なりは命を保てたわけです。

こういうふうに、本屋が何故値段を付けるかって言うと、その本に生きてもらいたいからなんです。高い値段を付けるってことはその本に、まあ百年ぐらいは生きてほしいから、高い値段を付けるんです。

高い値段を付けると、人は捨てないんです。分かりますよね。百円だから捨てちゃいますが、一冊の本が三十万なり、四十万なりしたら捨てる人は誰もいません。古本屋が値段を付けるというのは、そういう意味合いがあるわけです。

先ほどお話ししました昭和九年に（賢治が亡くなった翌

年です）、彼の全集が出ました。それも三巻本なんです。詩人の高村光太郎、草野心平、それから意外や意外、作家の横光利一が發起人になりまして、三巻の全集を出したんです。

何故横光利一が加わったかと言いますと、彼の奥さんが宮沢賢治の詩が好きで、賢治の生前からその才能を買ってたって言うんですね。亡くなって、宮沢賢治の作品を世に出してほしいと言うんで、旦那に話したんです。横光利一はそういうことならばって言うんで、出版社を探し始めたんですね。野々上慶一という人の経営する文圃堂という屋号の古本屋がありまして、古本屋さんとは言いながら、新刊も扱ってたんですね。もともと出版もやりたいと思ってたんですね。

この文圃堂っていう古本屋はですね、現在も雑誌、文藝春秋社から出ております『文学界』の版元だったんです。その野々上慶一さんに話をつけましたら、宮沢賢治全集を是非自分の手でやらせてくださいって言うんで、最初に出た三巻全集本というのは、いわば古本屋さんか

ら出版されたわけです。

妙な話がありまして、この野々上慶一さんの親類が、文圃堂で働いてるんですけれども、お金に困って、『宮沢賢治全集』の〈紙型〉（紙の型と書きます。昔の活版印刷の場合は、活字を組んで作った版に紙を当てまして、要するに凹みを作っちゃうんですね。その凹みの中に鉛を流して作った紙製の鋳型です）は、印刷屋さんにとっては財産みたいな大事なものです。金に困った彼はこの紙型を無断で持ち出しまして、それを担保に神田神保町の十字屋書店から金を借りたんです。

この十字屋書店も、同じく古本屋さんで、神保町で当時山岳書を専門にやっておりまして、現在神保町にございます一誠堂書店の親戚の方で、酒井さんっていう方が経営されてたんですけれども、「担保ではなく、この紙型を売ってくれないか」って、野々上さんに持ちかけたんですね。

この人は「宮沢賢治って、どういう詩人だろう」って作品を読んでみたら、非常に感動してしまって、それで

「よし、自分が完璧な全集を作ってみようじゃないか」と考えたんですね。三巻本には、宮沢賢治の主要な詩とか童話しか入ってないんですけども、賢治は大変作品が多くて、なんせこの人は一日に百枚原稿を書いた人なんです。一日に百枚ですよ。一か月で三千枚書いたわけです。普通そんなに、絶対に書けないです。言ってみますと賢治には狂気がついたとも言いますが、そういうかたちで書いたんですね。ほとんど一年で単行本十冊分ぐらい書いてやうんです。

そういう人なので、膨大な、活字になってない原稿があるわけです。そういう物まで全部まとめてやろうと、十字屋さんは考えたわけです。三巻本を元に、それに四巻ほど足して合計七巻からなる『宮沢賢治全集』を出します。これがいわゆる第二次全集と言われるもので、昭和十四年から十九年、私の生まれた年までかかって作られました。

三巻までは文圃堂の紙型を使い、四巻以降は新しく版を起こしました。昭和十八年に発行された六巻は四百四

十八頁の厚冊です。部数三千部作られております。戦争中です。戦争中にこんな立派な本が作られてました。要するに野々上さんと、十字屋書店の酒井さん、この二人古本屋でありますけど、金儲けの商売としてではなく、完全な全集を目論み、完結させたわけです。

一人の作家が世に出るまでの陰には、こういうドラマがあるということだけ、皆さんちょっと頭の隅に入れてください。古本屋というのは、単なる古本を売ったり買ったりするんじゃないに、こういう世に埋もれた人を世に出すために商売もやっつてるっていう、これを一つ頭に入れておいてください。

## 六、宮沢賢治の本

宮沢賢治は、生前、大正十三年に『注文の多い料理店』という童話集と『春と修羅』という詩集の二冊の本を出しました。どちらも自費出版のようなものです。一千部出したんですけども、ほとんど売れなかったと言

います。

でも、皆さんもご存じの詩人中原中也が『春と修羅』をちゃんと買っていて、読んで感動して、「すごい詩人が出たぞ、読め、読め」って言うんで、自分でも何冊か新刊書を買って友達に配ったんです。こういう事実がありますから、何冊か売れたんですね。

その一方で、全く売れなかった詩集っていうのもありまして、これ有名な話なんですけど、金子光晴という詩人がいます。この人の第一詩集『赤土の家』が、確か五百部作って書店通して販売したんですけど、たった一冊も売れなかった。

これは恐らく未だに破られてない記録だろうと言われてますね。だって考えてもみてください。友達がいるでしょう。普通なら義理にでも一冊位は買ってくれるはずです。でも金子光晴は誰も買ってくれなかった。本人も買わなかったんですよ（笑）。ちなみにこれは高い詩集です。そういう詩集ですから古書価格がすごいんです。皆さん頭に入れておいていただきたいのは、金子光晴と

いう名前で出していないで、金子保和という名前を使っているんですね。ですから作家にはペンネームがいくつあるということ、これも頭に入れて覚えておかないと、そういう掘り出し物を逃してしまふ恐れもあります。本名を使ったりもしますからね。

それから宮沢賢治には意外な本がありまして、これは詩集や童話ではない、地質調査書ですね。正式な題名が『岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書』という報告書なんですけども、これが大正十一年に稗貫郡役所で発行されておりまして、賢治の著書として非常に高い値段で売られております。

今日はあまり具体的な値段には触れず、高いってことだけ言います。と言いますのも、古本の値段は非常に変動しますので「なんだ、出久根が話した時、五十万してたハズなのに、なんで十万なんだ」ってことがよくあるんです。時代がぐるぐると変わってきますと、かつて人気の本がえらく安くなったりする。株ほどではありませんが、激しいんですね。ですから、あまり具体的な

値段は言いたくありませんが、でもこれ（冒頭の『国訳妙法蓮華経』）だけはお教え致しましょうか。こういうのが家から出て来ましたら、絶対に捨てないで古本屋さんに、しかも宮沢賢治のことをよく分かっている古本屋さんに持っていくって、買ってもらってください。二十万から四十万ぐらいが古本屋の売値です。

## 七、梶井基次郎

話は変わりますけれど、いま実践女子大の一階で、大変なものが展示されております。これは私ども古書業界でも、百年に一度あるかないかというような掘り出し物で、宝物ですね。梶井基次郎の原稿です。それが今、陳列されておりますので、私の話が終わりましたら、是非皆さん見て行っていただきたいと思います。

梶井基次郎、この人も三十一歳という若さで亡くなっております。この人の草稿を実践女子大学が所蔵しております。これはえらい面白い物だと思います。何故かと

言いますと、梶井基次郎の物ってなかなか出ないんですよね、市場に。原稿も手紙も、なかなかないんです。ですから、本当に素晴らしいお宝だと思います。

代表作に『檸檬』というものがございます。短編で、話は単純です。憂鬱な青年が、レモンを八百屋で買って、本屋さんの丸善に行きます。そして本屋さんの書棚から画集を引っ張り出しては、気に入らないんで書棚に戻さず、どんどんそこへ積んでいくんですね。画集の山を作った上に、自分の買ってきたレモンをポンと置いて、そのまま立ち去るといふ、それだけの話です。

なんだと言えはなんだなんですけども、鬱屈した青年の気持ちですね。これが一つのレモンという黄色い果物に具象化されて、そして丸善の自分が積んだ本の上にそれを置いて立ち去るといふこと。彼は、これは爆弾だって言うんです。このレモンは爆弾だと。これを置いたことによって、直後に爆発するかもしれないということ想像する。こういう内容ですね。

実践女子大で今展示されているのは、「瀬山の話」と

いう草稿ですが、これは『檸檬』の第一稿と言いますか、最初の草稿が書かれてるんですね。これと刊行された『檸檬』とを比べれば、梶井がどんなふう文章を推敲したか分かります。ちょっと私が書き写してきたんですけれども、「瀬山の話」の中で触れられている『檸檬』の文章というのは、こんな風に始まります。

恐ろしいことには、私の心の中のえたいの知れない嫌悪と言おうか、焦燥と言おうか、不吉な塊が重苦しく私を圧している。私にはもうどんな美しい音楽も、美しい詩の一節も辛抱出来ないのは、その頃のあり様だった。

それが『檸檬』になると、こういうふうにならされております。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧（おさ）えつけている、焦燥と言おうか、嫌悪と言おうか、酒

を飲んだあとに宿酔（ふつかよい）があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやってくる。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。

それにしても、梶井の物書きとしての計算はすごいですね、『檸檬』という短編小説のタイトルを、カタカナの「レモン」でもなし、ひらがなの「れもん」でもなし、漢字のちよつと難しい木偏の2字の文字をタイトルにしているんですね。漢字で表記していることによつて、先ほど話しましたような、檸檬を爆弾と思うという、爆弾のもつ不吉ですがががしい語感と、漢字の檸檬というのがピタツと合うわけですね。こういう計算をしています。

二十三歳の時、梶井は東京帝大生でこの『檸檬』を書いてるんですけども、当時は同人誌も出しておりました。彼は本郷三丁目の蓋平館という下宿にいたんですけど、そこは昔、石川啄木が金田一京助と一緒に住んでいた下宿なんですね。

同人誌の名前を何にしようかって仲間で相談した時に、梶井基次郎が「アザミはどうだろう」って言うんですね。花のアザミです。ところがアザミは水をあげない花だそうで、ちよつと縁起が悪いんじゃないかって言うんで、中谷孝雄の奥さんが「武者小路実篤にこんな詩がありますよ」って言うんで、その詩の一節を読んだんですね。

騒ぐ者は騒げ、俺は青空

こういう詩なんです。で「この青空はどうだろう」って話になった時に、それはいいっていうことで、梶井の考えたアザミは却下されて、青空という同人誌の名前に決まったわけです。その『青空』の創刊号に、『檸檬』が掲載されました。

でもみな学生ですから金がありません。印刷は値段の安いところに頼もうというので、岐阜の刑務所に、当時囚人たちが印刷をしており、安いって言うんで、そこへ



出しました。

話が逸れますけども、私ですね、古本屋の小僧時代に、同世代のお客さんが文学少年だったもので、彼らと一緒に同人雑誌を作りました。その時も、梶井と同じように安く出来るところないだろうかというので、中野刑務所に頼みました。そこへ友達と何人かで行ったんですね。刑務所つてのは初めて入りましたけれども、なかなか皆さん入れないですよ〔笑〕。印刷物の内容を聞かれるんですね。検閲じゃありませんけれども、「あんなたちエロ小説じゃないだろうな」って言われたんです。ところが思想的なものはいって言うんです。それは別に構わない。つまり左翼思想だろうが何思想だろうがそれは構わない。だけどエロ物だけはダメだよって係の人に言われたのはハッキリ覚えてます。三回ぐらい通いました。もっと通って刑務所の様子を知らなかったんですけど、三号で潰れてしまった同人誌でしたから、それっきりになりました。

梶井も岐阜の刑務所に出したんですけれども、印刷が

予定より一ヶ月も遅れてしまったんです。なんでかって言ったらば、檸檬っていう漢字、こんな漢字は普段なかなか使わないのに、梶井の小説ではそれがやたら出てくる、刑務所が活字の手当をしなくちゃならなくなり、それで一ヶ月遅れてしまったって話があります。なるほどなと思いましたね。私どもが同人雑誌をやった時にも、出てきたゲラ（校正紙）ゲラだらけなんです。〔下駄をはかせる〕って言うんですが、下駄の跡のような黒いものが、やたらめったら出てくるんですね。要するに活字がないからなんです。だからその活字はいちいち買ってはめ込まなきゃならなかったんです。えらいやすい値段でやってくれたんですけど、実際は相当元手と手間がかかったんじゃないかと思いますね。

私は、これは『作家の値段』にも書きましたけども、梶井基次郎には思い出があります。同人雑誌仲間の息子さんが、高校生の時に古本を集めるのが趣味になりました、やたら古本屋を回っては本を集めていたんです。あ

る時私のところに彼から電話がかかってきまして、梶井基次郎の『檸檬』の初版を見つけたって言うんですね。

高校生でも掘り出し物を見つけることはあるでしょうが、『檸檬』の初版っていうのは高価なものでして、滅多にありません。でも彼が古本屋さんに行ったら、それがあったって言うんですね。値段を見て買おうと思って本を取り出したら、隣にいたおじいちゃんが「俺が買ったんだ」って言ったら、その年寄りも頑固で「いや、俺が見付けたんだ」って取り合いになったって言うんですね。そしたら古本屋のおじさんが出て来て、お年寄りのほうに「まあまあ、若い者に花を持たせなさいよ」って言うんで、分けてくれたって言うんですね。「いくらで買ったの？」って聞いたたら「五百円だ」って言うんですね。私はもうビックリしました。

年寄りのお客さんと取り合いになったって言いますから、これは本物かもしれない。「とにかくちょっと見たいから見せて」って、高校生の息子さんに言ったんです。

ね。彼がやってきました。そしたら復刻本だったんですね。

実は今、宮沢賢治の『春と修羅』とか、梶井基次郎の『檸檬』のような現代文学の復刻本（複製本）が出版されております。初版と全く同じ作りで、同じ装丁で出てるんですね。古本屋を回りますと、これらが大変安い値段で売られています。でも彼の場合は、誰かがいたずらしたんでしょうね。普通なら、復刻本のいっとう最後には近代文学館の奥付が付いてまして、この本は梶井基次郎の『檸檬』という初版本を復刻（複製）しました、という注意書きがあるはずなんですが、それが破かれていたんですね。しかもいかにも古びたような、日に焼けたような、そういう色合いになって本物そっくりに造られていますから、これは間違えてしまいます。高校生ですから、まだ復刻なんてことは分かりませんしね。

でも「一つ勉強になりましたね」って息子さんに話したんですけども、本というものはことほどさように難しい。でもこれは安い高いの話じゃなしに、こういう本が

あると言うこと、それを知ったっていうこと、それ自体が一つの勉強です。それを五百円で買ったというのも、安い、高いっていうのはあくまでも本人だけの問題です。そりゃあ、私のようなプロから見れば高いかもしれない。でも梶井基次郎の『檸檬』の初版だと思って買って、それを大事にしていれば、決して高いとは思わないだろうって、そういう話をしたわけです。

今は、その高校生も結婚していい歳になってしまいいして、悲しいかな文学書なんて集めなくなっちゃいました。こういう趣味が今も続いてくれれば、古本屋も安泰なんですけれども。若い人が好きになってくれたかなと思っても、ある程度の歳になったらそれで終わりになってしまう…悲しいことですね。

## 八、寺山修司

作家、詩人の中で言いますと、皆さんもご存知の寺山修司という詩人がおります。作家でもあり、映画監督で

もあり、歌人でもあり、もういろいろとやった人ですね。彼も大変若くして亡くなりました。

この人も私には思い出があります。直接ご本人に会ったと言うことじゃなしに、寺山修司が亡くなった昭和五十八年の五月四日ですね、朝、高円寺で古本屋の店をやっていた私のところに、あるお客さんから「本を買ってくれないかっ」という電話が来たんです。「どれぐらいの量ですか」というと「段ボール一箱ぐらい」。「それじゃあ」と言うんで、近所でしたから自転車で出かけたわけです。

はつきり覚えてるのは、実はそのお客さんのところの本を買いに行って、出てきた本が、そう言っちゃなんですけれども、大した本ではありませんでした。どれも文学書で、段ボール一箱分買ってそこそこ商売になるっていう、その程度のもですね。荷台に本を乗せまして、帰って来たんです。

そうすると、私の店のちょうど裏手に河北総合病院という病院があるんですが、その河北病院の前を通りかか

りましたら、ものすごい人がたかってるんですね。映画の撮影をするようにカメラを回してるんです。なんだろうと思って自転車を止めて、そこにいたおかみさんに聞きました。「なんか寺山修司っていう人が、この病院で今しがた亡くなったらしいですよ」ってそういうことを言ったんですね。

「えっ」と思いました。実はその、私が今しがた買ってきた本の中に、寺山修司が大学時代にやっていた同人誌があつたんです。これはお客さんのとこに行ったら、廊下の下の地べたに放り出してあつたものなんです。帰りがけに「お客さんこの本、何ですか」って言ったら、「大学時代にクラスメイトたちから買われた、要するに同人誌だよ。そんなものは本屋さん金にはならないよね」って言うんで、「そうですか」って。

そうは言いましたが、そのお客さんは年配の方ですから、その頃の大学時代の同人雑誌というのは、これはちよつとなにかあるんじゃないかと。聞いたら早稲田大学だつて言うんで、早稲田大学って皆さんご存じのよう

に、日本の文学界の中では一番作家を輩出してる場所ですからね、いよいよこれはなんかあるんじゃないかなって思つて、見せてもらったら、『風』というタイプ印刷の粗末な同人雑誌が四冊あつたんです。何気なくパッと表紙をめくりましたらば、寺山修司と山田太一という名前が出てきたんですね。

山田太一さんというのは、『岸辺のアルバム』とかテレビドラマの脚本家ですね。山田太一さんと寺山修司さんは、多分大学の同期生だったのでしょう。「捨てちゃうんですか？ だったらこつちを譲ってください」って。これが正直言つて、最初のお客さんに値を付けたものよりもよっぽど儲けさせてもらった雑誌ですね。その雑誌が私の自転車の後ろに乗ってるわけです。その乗ってる本人がここで亡くなったっていうから、ビックリしていますね。

寺山修司という人は非常に高円寺に縁がありまして、これは私が高円寺で店をやつてた頃なんですけれども、お客さんがですね「大変だよ、阿佐ヶ谷の駅の辺りに警

官がすぐ出て、大変だ」って言うんですね。区役所  
回りだったと思いますが、「あの辺に警官がえらい出て  
て、大変な騒ぎをしてるよ」って。その日の夕刊見て分  
かったんですけど、寺山修司が〈野外劇〉というのをや  
ってたんですね。阿佐ヶ谷と高円寺で。

どういう劇かと言うと、「ノック」というタイトルの  
野外劇なんです。包帯を頭から足の先までクルクルつと  
巻いた包帯人間、そういう格好をした役者が、高円寺阿  
佐ヶ谷の実際の町を歩いて、全く知らない家のドアをノ  
ックするっていう、だから「ノック」というタイトル  
の、ただこれだけの劇で。観客はどうしてるかって言う  
と、その包帯男のうしろをぞろぞろくつついて、ノック  
された家の住人がドアを開けて、こういう反応を示すか  
つてのを見るための劇。

こういう劇を寺山修司が書いたんです。この包帯人間  
というのが、阿佐ヶ谷と高円寺の町のあちこちに三十人  
だか四十人いまして、そのあとに何十人かの観客がくつ  
ついて、だからのべ五百人位の観客が見たっていうんで

すね。全くのシナリオの無い即興劇で、これを楽しんだ  
って、そういうことが行われてたんです。

寺山修司は、そういうバカげたものを作った人でして  
ね、本人は市外劇と言ってますが、それを同時多発的に  
上演したと言ってます。

要するに、寺山修司の理念では、町が劇場だって言う  
んですよ。町そのものが劇場で、この町に暮らしてる人  
間が観客であり、役者であり、その両方を兼ね備えたも  
のなのだと。彼はその理念に基づいて、短歌を詠み、詩  
を書き、映画を作り、舞台をやったりしているわけで  
す。彼曰く〈劇場があつて、劇が演じられるのではなく  
て、劇が演じられると劇場になるのだ〉と。だから〈劇  
場はあるものでなく、なるものなのだ〉。だから〈町は  
劇場になりたがつてるんだ。さあ、台本を捨てて皆、街  
に出よう〉と、こういう思想になつてるわけです。

ですから『家出のすすめ』だとか、いろいろ書きまし  
た。『書を捨てよ街にでよう』なんていうタイトルの本  
も書いております。これは評判になりましたですよ。寺

山修司は売れっ子ですから、『書を捨てよ街にでよう』という、そういうタイトルの本を私の店に差ししておきますと、お客さんが「本屋さん、こういう本売っていいんですか」って言うんですね。横尾忠則の装丁で、当時非常に売れた本なんですけど、本屋には迷惑ですよ。『書を捨てよ街にでよう』なんてタイトルの本を書いてるわけですから（笑）、

寺山修司の原稿、これは大体鉛筆書きが多いです。ほとんど鉛筆書きじゃないでしょうか。でも非常に人気があります、古本屋さんでも結構高いですよ。若い人で寺山修司のファンってのは多うございまして、最近も一種のブームみたいになってまして、寺山修司の書いたものが欲しいという、どうしても原稿をですね、こういうものをお求めになる方が多くあります。

第一作品集が『われに五月を』と言います。これは二十一歳の時に書いております。第一歌集が二十二歳の時に出した『空には本』。ちょっと異様なタイトルですが、これには寺山修司の一番有名な歌が入っております、

マッチ擦るつかのま海に霧深し 身捨つるほどの祖国  
はありや

それから私が一番好きな歌もこの中に入っております。

マラソンの最後の一人うつしたるあとの玻璃戸に  
冬田しずまる

「マラソンの最後の一人」、一番最後を走ってる一人を映したる「あとの玻璃戸」と言いますのは、ガラス戸のことです。ガラス戸に、「冬田しずまる」っていう、田舎の田んぼ道をマラソンの選手たちが駆け抜けて行ったあとの感じですね。これは分かりやすい歌なんです。

寺山修司と言う人はちょっと変わった歌をよむと言うか、創作します。

大工町 寺町 米町 仏町 老婆買ふ町 あらずや

つばめよ

母を売る相談すすみいるらしも 土中の芋ら ふとる

真夜中

情死ありし川の瀬音をききながら、毛深き桃を剥き終  
わるなり

なんとなく分かりますか。どこことなく不気味な、イメ  
ージとしては非常にいやらしいような、そういうものが  
思い浮かぶ歌ですね。

また大変凝った人でもありました。この人の長編に  
『地獄篇』っていう詩集がありまして、これは本体であ  
る詩集に、付録として（ハンガーとか、蝋燭とか、縄ですね）  
がビニール袋に入って付いているんです。ですから、付  
録がないと古本屋では落丁本扱いになってしまつて、売  
れないんです。

不親切なことに、本体のほうに、この本にはしかじか  
の付録が付いてますって断り書きが無いんですね。です  
から、この『地獄篇』を古本屋で買う時に、随分安いな

つて思つて買つてきて、あとで知つてる人に聞くと「そ  
れ付録付いてた？」つて言うんで、やっぱり付録がない  
…。こういう例が多いですね。だつて蝋燭とか、縄と  
か、そんなものが付いた付録ですよ。これは非常に迷惑  
な本ですね。寺山修司はそれを面白がつてたところもあ  
ります。

ですから、寺山ファンと言いますのは、こういう変わ  
つた本であるとか、映画のチラシ、ポスター、台本、そ  
ういふものを集めるのが、非常に楽しいようです。結構  
あるんですよ。集め出すとキリがないくらいあります。  
これはやっぱり一人の詩人の全容と言いますか、それを  
知るために集める楽しみがあるわけですね。

宮沢賢治が遺言を残した本を集めるとか、それから寺  
山修司の付録つきの本や映画のチラシや、要するに作家  
の名前が印刷されていれば、全部欲しいと言う気持ち、  
それが実は作家を育てるというか、愛おしむかたちにな  
りますね。何のためにもならないことなんですけれど  
も、そういうたににならないことが、文学の楽しみなん

だと言っていることを知ってほしいわけです。論文を書くとかいう、まっとうなものじゃなしに、遊びの部分、文学にはそういうものがあると言っていることですね。遊びとして、作家のものを楽しむ、こういう気持ちがあってもいいと思います。

今日はですね、私の古本屋としての仕事もありますけども、古本屋から見た作家たちという視点からお話させていただきます。古本屋というのは、こういうことを調べながら論文を書くわけじゃありません。古本屋の論文は値段です。調べたことを値段に反映していく。これが楽しみなわけです。つまり調べる楽しみです。プロセスを楽しむ。一人の作家の陰には、こういうドラマがあるということを、皆さんも是非、作品を読みながら、その作品の裏側を辿っていただきたいと思っています。

## 九 石川啄木

石川啄木の日記に、啄木が煙草代に困りまして、古本

屋に本を売りに行く一節が綴られております。北原白秋から貰った詩集とかなんかの中に、『あこがれ』という自費出版した自分の詩集を（売れないから在庫が何冊もあるんですね）三、四冊混ぜて古本屋に持って行ったら、他の詩集は何十銭かで取ってくれた。じゃあ『あこがれ』は？」って言ったら、古本屋のおやじが「五銭ですね」って言ったというんですね。『あこがれ』の定価は五十銭なんです。

ですから、一割で引き取ってくれたっていうのは、この古本屋のおやじはそれだけ啄木を買ったって話になります。でも私は、これは義理でつけた値段だと思えます。可哀想だなと思って。だって石川啄木はその頃全く無名なんです。『あこがれ』は今でこそ古本屋で百万近い値段で売ってますけれども、当時は全く無名の詩人ですし、無名人の詩集は古本屋に持ってたって、今でも一銭の値段も付けてくれません。それを五銭もつけてくれたってのは、古本屋のおやじ大したもんです。同じものが三冊もあるから、この人が作者なんだなって



いうんで、古本屋のおやじは義侠心から五銭の値段を付けてくれたんですよ。

啄木は日記の中で「これは五銭ですよとおやじが言った、はははは」と苦笑している文章を書いているんですね。啄木にとっちゃ、そりゃ自分の詩集を五銭に評価されたってことは不本意でしたしょうけれど、私は、この五銭に評価した古本屋は偉いと思います。あの当時、明治の時代に、値段を付けた古本屋を私はむしろ買います。ですから、こういうふうには啄木の日記を表から見ると、つまり私どもはややもすれば啄木に寄りそって見てしまいますから、「ああ、かつてはこういう天才詩人も、こんな値段で自分の詩集を古本屋に引き取ってもらっていたんだなあ」というふうには見えないです。だけど、古本屋の私が、古本屋側のおやじの立場で読みますと、とてもじゃないけれども、無名の詩人の詩集なんかには値段は付けない。「いや、これはお引き取り下さい」と言うだけです。それを五銭で買ったこの古本屋のおやじってというのは、私は大変偉いと思います。

先ほどの本郷三丁目の蓋平館で下宿してる頃の啄木の日記ですから、本郷にある古本屋さんですよ、だから、誰だろうかと、この古本屋さんを探してるんですよ。名簿がちゃんとありますから。啄木はどこに出入りしてたか、啄木が詩集を売りに行った。じゃあ詩集を主に扱っていた古本屋はどこだろう。そういう具合に調べていくわけです。ドラマが生まれてくるだろうと。これ以上話しますと、私の小説家としてのドラマとなってしまうそうです。ちょうど時間も定刻が参りましたので、ここで終わりにしたいと思います。

### 質疑応答

#### ◆栗原

涙するところあり、楽しく笑いを誘うところありで、本当にありがとうございました。質問の時間をとってございますので、今日のお話しに関連したこととか、それに触発されたこと、或いは日頃感じていることでこの機

会に伺ってみたいこと等々、ご質問のある方はどうぞご遠慮なくお手を挙げてください。

◆質問者 A

今日はどうもありがとうございました。作家と装丁者との関係についてお尋ねしたいのですが、例えば作家は、この装丁者に装丁してもらいたいとか、そういう関係ってのはございますか。

◆出久根

これは力関係なんですよね。売れる作家でしたら、そういう要望は全部通るわけです。しかし私のように売れない作家ですと、なかなか……。こちらが一流の装丁家に頼みたいと言いましても、結局はお金の問題ですね。ですからやっぱり力関係。

そうは申ししましても、編集者の熱意って言いますか、本当は編集者っていうのは内容だけじゃなしに、装丁から、本の作りから全て、紙とかですね、その辺まで通じ

てないとダメだろうと思うんですけども、なかには装丁に全く関心のない編集者もありまして、どうしてもこちらの意に添わない装丁をされてしまったこともありますね。

一番嫌になってしまうのは、私なんか本を出しますね、例えば書物に関するエッセイ集を出すとして。そうすると、装丁に関心のない編集者はですね、あんまり本を好きでない装丁家に頼んじゃうんですね。そういう装丁家の人が書いた絵というものは、本を好きな者から見ると、なんか熱がないというか、違うんじゃないかなというような、そういう感じがするんですね。上手、下手じゃないんです。もちろん装丁家はプロですから、技術は一般の我々なんか及びのつかないものがあるけども、本に対する思い入れがあるかないか、そういうところが出てくるような気がするんですね。

ですから、作家によっては非常に装丁に凝って、この装丁家以外はダメだという人もいますようです。同じ装丁家が同じ作家の本を担当しているのは、大体そうだと思います。

うんですね。私の場合はむしろ、編集者にお任せしてしまっています。私のものを手がけてくれる編集者は、大体声をかけてくださった段階で、本が好きで、古本が好きな人が多いので、まず間違いない装丁を施してくれますね。

#### ◆質問者 A

もう一つ、先生のエッセイの中で、「三浦哲郎氏訪問記」を読んで非常に感激しました。友達と一緒に自宅まで訪問したというような文章を読みまして、そのくどりが大好きで何十回も読んで、うるうるつと来てしまって、その状況つていうのを、先生から直接お聞かせていただければと思います。

#### ◆出久根

私が上京して古本屋の小僧になりましたのが、昭和三十四年、天皇皇后両陛下が結婚なさった年なんですけれども、あの話は、確か三十五年に三浦哲郎さんが『忍ぶ

川』で芥川賞を受賞した年のことです。『忍ぶ川』を読んでひどく感動しましてね。私はその時十六歳でしたが、どうしても著者に会いたくなつて、それで出版社（新潮社）に電話を入れたんですね。「三浦先生の住所を教えてください」つて。そしたら「何の御用事があつてお尋ねするんですか」と咎められたわけです。

その頃私は中学を卒業して、集団就職で東京へ出てきてました。勤労少年という言葉が流行つてまして、要するに私どもは「けなげだ」と言われたわけですね。その頃は経済が成長発展して行く寸前で、なんの商売でも人を雇えば儲かった時代なんです。田舎では人が溢れている、都会では人を雇えば儲かる。だから、ここで集団就職というシステムが生まれたわけです。雇えば儲かるという、今考えると夢みたいな話で、東京では八百屋さんとか自転車屋さんとかも、店員を雇えば雇うほど売上げが伸びた時代なんです。安く雇えたからです。だから〈金の卵〉と言われたんですね。

私は上の学校に行きたかったんだけど貧乏で行け

なかったから、本屋に行けば、本が読めて勉強が出来るんじゃないかって単純な理由で応募したんですけれども、田舎の子供ですから、本屋と言えば新刊屋さんしか思い浮かばず、新刊書店だと思って就職したら、実際は古本屋さんで、とても出世出来るようなところじゃないなと思いましたよ。でも逆に言いますと、古本屋で良かったんです。新刊屋さんだったら、忙しくて本を読む時間がない。古本屋は暇ですから、本を読む時間ばかりあるんです。そういうかたちで自分は勤労少年だったことを電話で話したら、新潮社の社員がですね、住所を教えてくださいました。勤労少年って、いわば水戸黄門の印籠みたいな物ですね（笑）。

友達と一緒にきました。彼はこないだ竜巻被害にあった筑波町の北条で洋品店をやってる土子隆輝という友人で、同人雑誌も一緒に出してたんです。

当時三浦先生は結婚して娘さんが一人いて、練馬区高松町のアパートの二階に住んでました。田んぼの中にぽつんとアパートが立ってまして、友達と地図を見ながら

行っただけですけど、分からないんですよ。地図を見ても田んぼですから番地は書いてないし、安物の地図なんだと思うんですけど、アパートの近所に神社がある。今考えば笑い話なんですけど、八幡様なんです、八幡神社って読めなくて、やはた神社って読んだんです。「やはた神社がこの辺にありませんか」って聞いたら「聞いたことねえな」って（笑）。「そんな神社あったかね」なんて言ってね。何人目かに聞いたたら「学生さん、これ八幡神社って読むんだよ、お宅、本当に学生？」なんて言われて。その八幡様の近くのアパートに行っただけです。

夏でして、三浦哲郎先生は、二階が仕事場なんです。奥様からそこに通されて、茶の間があつて、その隣が書斎、書斎って言っても、六畳間だったと思います。六畳間に本棚が一個ありまして、机の上に将棋盤が置いてあったんですね。私どもが訪ねたら、三浦さんが白い浴衣姿で、カッコいいなと思いましたね。白緋の浴衣を着てまして、当時の写真を拝見してもビックリするぐらいの美青年、役者のような顔立ちでした。

そして「先生忙しくなかったですか」って伺ったんです。突然お訪ねしたんです。土産も持っていかなかったんですよ。持っていったら逆に悪いんじゃないかって、十六歳の少年ですからね。そんなことを考えるほうが怪しまれちゃいますから、持っていかなかったと思うんです。

「いや、退屈で一人将棋をやってたんだよ」って言うんですね。私は将棋を知らないんですけど、友達の土子は将棋を打つんで、あとで帰りの時に「先生、俺達と会ってくれるために嘘をついたんだよ。だって将棋の駒がでたために並んでた」と言うんですよ。私もそう言われれば、原稿用紙が広げてあって、その原稿用紙の上に万年筆が置いてあって、万年筆のキャップが外れてたんです。裸のまま置いてあったんです。ってことは、今しがたまで原稿に向かってたわけです。原稿を書いてたんだと思います。万年筆のキャップが外してあるってことは、多分書いてたんだって思いましたね。

で、どんな話をしたかといえば、先生はちょうど芥川

賞もらって、私は古本屋の小僧ですから、いろいろ逆取材と言いますか、聞かれました。『忍ぶ川』の文庫化の話が来てるんだけど、君たち、どこの文庫がいいと思うかね」ってなことを聞くわけです。あの頃、新潮文庫と角川文庫があつたんですね。「新潮文庫がいいですよ」って話して、そういう感じで2時間ぐらい話したと思います。

また田んぼ道を駅の方に帰って来たんですけど、何気なく友達と後ろを振り返りましたら、田んぼの中の一軒のアパートですから、よく見えるわけです。二階から先生が私どもに向かって手を振ってるんですね。随分歩いて来てるのに、何気なく気配を感じたと言うか、なんとなくひよっと振り向いたら、浴衣がけの先生が、窓から背を伸ばして手を振ってるんですよ。それが見えた時、そりゃ感動しましたね。この先生の本を死ぬまで買うぞっていうんで、以来私はずっと三浦さんの著書を集めまして、亡くなるまで集めてたんですね。

でもたった一冊、今でも集まらないものがあるんで

す。三浦先生の少女小説なんですけども、『ひとり生きる麻子』という集英社のコバルトブックスから出した本が未だに入手出来ないんです。これはついに先生が生きてらっしゃる間に探せなかった。

◆質問者 A

貴重なお話をどうもありがとうございました。

◆出久根

とんでもないです。講演よりも、こういう無駄話のほうが喋ってても面白いような気がします。なにか他にございましたら、今日はなんでもお話ししましょう。

◆栗原

皆様、どうぞご遠慮なく。

◆質問者 B

ここの卒業生なんですけど、年齢は相当上です。私は

実践女子大を卒業して、集団就職の人たちの舎監を四年間やっただけです。それを一冊の本にまとめたのですが、その集団就職と出久根先生とが繋がって、どうしても一度お会いしたいと思って、今日は藤沢のほうから出て参りました。

◆出久根

すごい、ありがとうございます。

◆質問者 B

それでまさか今日、先生とこうしてお話しが出来るとは思っておりませんでしたので、後でお渡しできればと思います、その本に手紙を添えて持参しました。出版社が破産してしまって、それっきりになってしまったのですが、集団就職関係の本っていうのはあまりないですね。

◆ 出久根

ほとんどないです。

◆ 質問者 B

だから読みたいっていう人がたくさんいると思うんです。著作権が私に戻ってきたので、これをどうにかしたいと思ったり、このまま大事にとっておこうかなって思ったり、先生にちよつと読んでいただきたいなと思って…。

◆ 出久根

ありがとうございます。それはもう喜んで読ませていただきます。

今のお話のように、集団就職について書いた本ってのは殆どないんです。私も集団就職の経験者ですから、一度調べて本にしておこうと思ひまして、手を尽くしたんですけれども。実は当時は労働省（現在の厚生労働省）の管轄でしたが、そこでも正式なものを出してないんで

す。

集団就職がどこから始まったのか、私の調べた限りでは、「サザエさん」で有名な長谷川町子さんが住んでらした世田谷区桜新町、あそこの商店街で始めたのがはじまりと言われてます。もう亡くなりましたけども、警視庁の桑本実敏さんという、狼刑事と言われた敏腕刑事、この方から聞いた話です。

何故この方が知ってたかっていうと、世田谷署で勤務してたんですね、その商店街の旦那衆が、先ほど話しましたように景気がよくなつてきて店員を雇いたいと。それで、皆で手分けして田舎に出かけて行って、少年少女たちを連れてきたのが始まりらしいんです。

これに目を付けたのが当時の労働省でして、田舎では人が余ってる。都会では人が足りないって言うんで、これを結び付けようっていうんで、その集団就職のシステムを考えたんですね。ですから、今あの〈サザエさん通り〉で有名な桜新町が発祥の地だと思います。そういう具合に、集団就職について真面目に書いた本てのは確か

にないんです。

◆質問者B

私は四年間ほど、NECのトランジスタ・ガールたちの舎監をしていたのですが、その子たちとはその後もずっと付き合ってるんです。毎年一回集まってるんですね。それでその後のことも書きたいなと思ったり、いや、当時のまま置いておきたいのかなと思ったり、出来たら先生にこれを読んでいただきたいと思って、今日は持って参りました。よろしくお願い致します。

◆出久根

ありがとうございます。いやいや、そうでしたか。集団就職者といえば、例えば歌手で言いますと、ハスキーな声を出す森進一さんがそうですね。あの人は確か大阪の鉄工所に行ったはずですね。つまり九州、中国、近畿、四国の子供たちは大阪に、東北や関東の子供たちは東京に行くと、だいたい分かれたわけですね。

中学を卒業して就職先はというと、女の子はだいたい事務員か女中。男は中小企業の工場の工具か、商店員でしたね。私自身は、昭和三十四年に中学校を卒業して、商店員になりました。銀座四丁目、もんじゃで有名な月島の文雅堂書店っていうところに就職したんですけど、休みが月に二回ありまして、銀座が近いので、よく遊びに行きました。あるとき銀座四丁目の角に立っていたら、むこうから裸足で自転車を漕いでくる少年がいるんですよ。「あれ、銀座四丁目で、裸足で自転車に乗ってる子がいる」と思って、珍しいなと眺めてたら同級生だったんです。

彼は新橋の自転車屋に就職してまして、「どうしたの？」って聞いたたら「今、日本橋まで壊れた自転車を引き取りに行ったんだ」って言うんですね。「これペダルが壊れてて、靴で漕ぐと靴がすつ飛んじやうなんだよ」って言うんです。それで裸足で壊れたペダルの自転車踏んできたって言うんですね。「良かったな」ってんで、銀座の真ん中で、田舎の少年二人がパタッと会うとい



う、今考えると不思議ですけども、裸足で自転車漕いでたつてのが時代ですよ。

その彼が「毎日朝、昼、晩と、ご飯のおかずはひじきの煮付けなんだよ」って言うんですね。三食ともひじきの煮付けで、汚い話ですけども、「真っ黒なうんこが出るんだよ」って、こう言うんですね。それが当時の現実だったんです。その子は間もなく自転車屋を辞めましたけれども、私はその頃、初任給が三千円だったんです。三千円っていうのは非常にいい給料でして、私が本屋に行ったっていうのは、新刊屋さんで本が読める、勉強出来るっていうのは、これは建前でして、本当は給料が良かったからなんです。要するに衣食住付きで三千円ですから、手取り三千円なわけです。

当時大学卒で初任給が一万一千円の時代でした。昭和三十四年。私は三千円で自分の小遣いと身の回りの物ですね。そういうものを買って、残りを田舎に送金してました。あの頃、集団就職の少年少女ってのは、田舎に送金するつてのが当たり前って言われてた時代ですから、

別に私が特別偉い勤労少年というわけでもないですね。

女の子たちのなかには、「給料がいいところがあるから、そつちで働いたほうがいいよ」って言うんで、事務員をやめて例えばキャバレー勤めをするとか、そういう女の子も多かったです。墮落するとかしないというのは、それはもう本人の気持ちですから。落ちて行った人もいたでしょうけれども。あの頃の女の子たちというのは、キャバレーかなんかに勤めると、突然衣装が派手になるんですね。田舎に帰る時も、ものすごく先端を行く服装で帰るわけです。今考えますと、当時の集団就職の少女たちが日本のファッションを変えて行ったんじゃないかな。つまり田舎の人たちもそれに感化されて、だんだん派手な物を着るようになってくる。

電化製品もそうですね。例えば集団就職の子供たちが、お金を貯めて親孝行するというのは、田舎にテレビを買って送るとか、トースターを買って送ったんですね。ですから田舎のほうむしろ電化が進んでくる。子供たちがみんな買って送ってるからなんです。

だからファッションも、そういう日本の電化製品もです、私は都会から発展していったんじゃないに、むしろ田舎から逆に日本全国に流行していったのではないかっていう考えを持っております。別に研究したわけじゃないですが、そういう実感はありますね。とにかく都会で働いてた十代の女の子たちは、派手な衣装を着ててもプライドがありまして、自分が一生懸命汗水流して働いた金で買った着物なんだから、恥ずかしいことはないっていうそういう気分なんです。ですから、田舎にものごく派手派手しい格好で帰るんです。むしろ彼女たちにとっては、それが自慢でもあったと思うんですね。そうやって日本のファッションってのは、私は改革されてきたような気がするんです

なかなかこういう、当時働いてた十代の人間たちの意見というのが、先ほど申しましたように研究書が出てないために、まとめられてないわけです。今のうちに研究しないと、私のような体験者が段々いなくなってくるわけですよ。集団就職を経験した者の大半は、無論中には

例外もありますが、真面目に生きたけれども、いわゆる出世っていう型からは外れて、有名にはならず、静かに年をとっているようです。

ともあれ、お持ちの御本は後ほど読ませていただきます。ありがとうございました。

#### ◆質問者C

先ほど、先生の場合は作家としての物語を作るお仕事の部分と、古書店主としての実業家の部分があるというようなお話がありました、最近先生が出版社のPR誌に書かれております「幽蘭について」などは、ちょうどその二つの部分が重なっているのかなと思って伺っております。

今回このお話をお書きになったきっかけも、そういうものと重なるのか、またいずれこの連載をおまとめたいただけるのか、その辺りのことを教えていただければと思います。

## ◆ 出久根

今の話は『ちくま』という筑摩書房のPR誌に書いている『幽蘭』のことですね。幽蘭の「ゆう」と言うのは幽霊の幽、「らん」は花の蘭で、幽蘭。本荘幽蘭という女性の名前なんです。こういう女性がいまして、この女性には別に有名人じゃありません。ただ、古本を扱かってる人間がまれに聞く女性の名前なんです。

なにをやった人かって言うのと、別にこれといったことはしてないです。女優になったり、喫茶店を開いたり、カフェを開いたり、かと思うと舞台に立ったり、新聞記者になったり、満州に渡って馬賊になったり、私がちょっと調べただけでも二十いくつかの職業を転々としてる。その職業を転々としたっていうのが、彼女のいわば全てです。

なんでそういう女性が生まれたのか。何故そういう女性を私ども古本屋が知ってるかと言いますと、ちょっと風変わりな人生を送ったっていうことで、いろんな文獻に出てくるんですね。業績はないけれども変わったこと

をした人っていうのは、古本を好きな人たちの大好きなキャラクターでもありますので、その一人なんですね。

私はこの本荘幽蘭っていう女性が、何故そんなふうに変々といろんなことに手を出していったのか、一度彼女を主人公にした小説を書いてみたいと思ったのです。私の小説はその女性が何者だったのかを追求していくプロセスを書いているだけなんですけども、なかなか謎の多い女性ですから、いろいろ訳のわからないところが出てくるんですね。

一つの例として、『国歌大観』という日本の国歌の集大成ともいえる膨大な編纂書があります。松下大三郎っていう国学院大学の先生が編集したのですが、彼女が彼女を助手として雇ったんですね。新聞広告を出して。当初は「家政婦を求む」と募集したんです。それに本荘幽蘭が応募して、いつの間にか『国歌大観』の編集にまで加わってるんです。

編集というのは、和歌の分類ですね。彼女は明治女学校の出身です。中退なんですけども、明治女学校では中

村屋の創業者の相馬黒光と一緒だったんです。一方で彼女は精神的におかしな女だって、そういう説もありまして。でも無学の女性に『国歌大観』の編集の手伝いが出来るでしょうか。和歌を理解出来なければ『国歌大観』の編集なんか出来ないわけですからね。そういうことに介入してること自体が謎で、私がこの本荘幽蘭という変わった女の一生を書こうかと思った原因なんです。

しかし『国歌大観』自体には、本荘幽蘭のことは一言も書いてないんですね。また松下大三郎伝には家政婦、女中を雇ったことは書いておりますけども、他には一言も出てこない。ですから、あらゆる面から今度は『国歌大観』の編集状況を調べていかなくちやならない。もうこれはこういうことを調べました、こういう事実が出て参りましたっていうのを毎号、毎号報告するのが幽蘭という小説だと思ってください。結束までは言わないほうがよろしいと思います。二十回で終わる予定で、現在六回目です。

◆栗原

ありがとうございます。今お話にあった連載は、私も楽しみで、毎号読んでるんですけども、先ほどの石川啄木の詩集を買った古本屋さんは、どこかの話からアレと同じだなと思ったら、今質問された方と同じような興味を持って伺いました。

ちょうどいい時間になったようです。このあと下の展覧会場では、本学准教授河野龍也がギャラリートークを担当いたしますので、お時間のある方は是非お付き合ってください。今日は本当に、どうもありがとうございました。